

高卒無業者の教育社会学的研究(2)

大都市高校3年生調査(第2次)の分析

○耳塚寛明(お茶の水女子大学) ○佐藤(粒来)香(東京工業大学) ○長須正明(東京都立工業高等学校)
小杉礼子(日本労働研究機構) 大道真佐美(お茶の水女子大学大学院)
堀有喜衣(お茶の水女子大学大学院) 諸田裕子(お茶の水女子大学大学院)

第1章 高卒無業者層へのアプローチ

< 漸増する高卒無業者層 >

一般に高卒者が辿ることになる伝統的な進路は、第一に四年制大学と短期大学への「進学」、第二に直接実社会へと入る「就職」であった。これに70年代中葉以降、専修学校専門課程すなわち専門学校への入学が加わり、その後の鰻登りの入学者数の増加とともに第三の進路として定着してきた。事態に変化の兆しが現れたのは、90年代に入ってからである。90年代以降、高卒者の進路の中で、もっとも注目すべき変化をみたのは、いわゆる「高卒無業者層」の動向だった。「高卒無業者」とは、高卒時点で、上級学校へ進学・入学する者、就職する者、死亡・データ不詳の者「以外」を指す。文部統計上のこのカテゴリは平成11年度学校基本調査速報版から「左記以外の者」に改称されたが、要するに、進学するでもない、就職するでもない者を指す。高卒者に占める無業者の率は92年の4.7%をボトムに漸増を続け、最新の2001年には男子9.0%(約6万人)、女子10.6%(約7万人)に至っている。

< 高卒無業者層漸増の背景:問題群 >

高卒無業者は、いったいどこで、どのようにして生み出されてきたのか、そしてそれはいかなる帰結を高等学校教育さらには全体社会にもたらすことになるのか—これが、本研究の主要な問題である。90年代以降、高卒無業者層が漸増してきた背景には、以下のような複数の要因が関わっていると考えられる。

①高卒労働市場の逼迫 景気停滞、高卒から大卒等への求人シフト、非正規労働市場の拡大(パート・アルバイトによる労働力の調達傾向の高まり)を背景に、高卒労働市場が著しく縮小した。

②高校生文化の変容 学校生活へのコミットメントの低下、生徒役割から逸脱した生徒層の増加、消費文化への接近などが、青少年の進路形成や職業意識の形成、とりわけフリーター志望と関係している可能性がある。

③教育理念や進路指導の変容 臨教審以降の教育政策のベクトル転換によって、教育指導は、「個性重視の原則」へとパラダイム・シフトを経験した。内発的な進路意識の高まりに期待し、生徒たちの「個性的な進路選択」を尊重し、結果的ではあれ「進路未定」

や「フリーター」を正当化する方向へと、進路指導は変化しつつある。この変化は、個性重視の原則のもとで「自分探しの旅」を支援する進路指導として、より肯定的な意味を与えられることもある。

④家庭的背景 高校生の進路選択には、家庭的背景が密接に関わっていることがすでに知られている。近年の少子化等を背景とした高等教育進学率の上昇によって、これまでわが国の高校生の進路選択を枠づけてきたトラッキングが弛緩し、階層的な進路の選好が、進路選択に対する影響力を強めている可能性がある。

< 第1次調査 >

われわれはこうした問題群に接近するために、1999年度から以下のような調査研究を行い、第1次報告として本学会大会(第52回大会、北海道大学)においてすでに報告を行ったほか、報告書も刊行した(お茶の水女子大学教育社会学研究室『高卒無業者の教育社会学的研究』2000年12月)。

①文部省学校基本調査および高校総覧(リクルート)を用いた、既存統計分析

②高校進路指導に関する教員インタビュー調査

③高校教員対象の質問紙調査

④高校2年生対象の質問紙調査(対象は東京都に所在する高等学校21校に在学する高校2年生2476名。調査対象校は、相対的に無業者を多く出しているいわゆる進路多様校。1999年11月～2000年1月実施)(第1次調査の結果要旨は、当日配布する。)

< 第2次調査 >

第1次調査に引き続き、2001年1月に、前年度対象とした高校生に対して再度質問紙調査を行った(高校3年生1月)。卒業後の進路が概ね内定済みの時期にあたる。今回は、この第2次調査、および第1次調査と第2次調査を接合したデータに基づいて、次の点に焦点づけた報告を行う。

第2章 高卒無業者のタイポロジー 高3・1月の時点での内定進路を概観し、また高校在学中の進路志望の変化を追うことによって、そこからフリーターが生み出されるプロセスを明らかにする。さらに、「進学断念型」「就職断念型」「目標設定型」「モラトリアム型」というフリーターの類型学を展開する。

第3章 職業生活意識と無業者 「いまの世の中、定職につかなくても何とか暮らしていける」などの職

業生活意識と、経済的自立についての意識(何歳くらいになったら経済的に自立しなくてはいけないと思うか)を分析の対象として、高卒後の進路別に、またフリーターの類型別の特徴を明らかにする。

第4章 誰が無業者になるのか 家庭的背景と進路分化の関連を検討した後、学校階層上の地位、労働市場における学校の地位、生徒役割へのコミットメントの度合い、アチーブメントなどの変数を加えた分析を行い、「誰が無業者となるのか」に関して総括的な議論を行う。

<第2次調査の概要>

対象:東京都に所在する高等学校17校に在学する高校3年生。調査対象校は相対的に無業者を多く出しているいわゆる進路多様校。第1次調査の対象校から選定。地域的なバランスと学科を考慮して対象校を選定し、3年生2131名に対して行われた。普通科11校、専門学科6校。

調査時期:2001年1月

調査方法:質問紙による集団自計式調査

調査内容:校内・校外生活、予定進路

回収票の構成:性別<男子905名 女子1167名 無回答59名> 学科別<普通科1297名 農業科180名 工業科165名 商業科489名> 予定進路別<正社員内定447名 正社員未定93名 専門・各種学校決定485名 専門・各種学校未定116名 短大決定116名 短大未定30名 四大決定174名 四大未定201名 フリーター300名 家業手伝い20名 その他38名 全く決めていない49名 無回答62名>

<報告中、「フリーター」「準フリーター」は以下を指す。

フリーター:卒業後の進路として「フリーター」を選択した者。

準フリーター:自らフリーターと回答していないが、調査時点で「他の進路(進学または就職)を希望していたが現在のところ未定、あるいは卒業後にどうするか全く決めていない」と答えた者。>

なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤C)の助成を受けている。(耳塚寛明)

第2章 高卒無業者のタイポロジー

1. 高卒後の進路状況

まず卒業後の進路状況を概観する(表 2-1 省略)。「フリーター」(14.1%)と「準フリーター」(13.5%)を合計した「無業者」は27.6%(588名)にのぼる。1年前(高2冬)の進路希望では(回顧データ)、「フリーター」は4.1%にすぎず、この1年間で「無業者」が大幅に増えたことになる。進路「フリーター」について高2冬の進路希望をみると、専各(30.0%)>就職(23.7%)>考えていなかった(15.0%)>フリーター(10.3%)で、過半数が専各または就職であった。進路「準フリーター」も同様の傾向にある。

2. 進路希望からみた無業者の輩出構造

2-1 高2冬の進路希望と現在の進路との関係

高2冬の進路希望と決定進路を表 2-2 (省略)に示した。就職率が非常に高いS高校のサンプルを除いた結果は就職bとしてある。高2冬の進路希望が現在の進路である比率(一致率)をみると、四大(浪人を含む)が58.7%と最も高く、次いで就職aが51.2%だが、就職bでは45.4%となる。高2冬「フリーター」の一致率は35.6%にとどまるが、準フリーターとの合計は54.0%となる。専各と短大の一致率は他の進路希望よりも低く、一致率が算出されない「(進路を)あまり考えていなかった」「その他」ではフリーター希望に次いで無業者が多い。

全体的な傾向として、一致率の高い進路希望ほど無業者率が低い(図 2-1 省略)。高2冬の「フリーター」「考えていなかった」「その他」では半数近くが無業者である。この時点での進路希望が無業者になるか否かに大きな影響を与えている。ただし就職bと専各は一致率が4割強、無業者率が約3割であり、人数的も、この2つの進路希望から無業者の半数近くが輩出されている。また短大希望は一致率が低く、人数は少ないが無業者率が高く、フリーターが準フリーターを大きく上回る。

2-2 進路希望の揺れやすさと無業者率

調査では高2の冬だけではなく、高3の春・夏・秋についても進路希望を尋ねている。この4時点で回答が同一である比率(一貫率)を高2冬の進路別に算出したところ、一致率が高い進路ほど一貫率も高い傾向にあることが認められた。就職(就職a、就職b)や専各では一貫率>一致率であるが、短大・四大・フリーターでは一貫率<一致率となる。一貫率>一致率である進路では、進路希望が一貫していても実現しなかった者がおり、そこから無業者が輩出されていると考えられる。逆に、一貫率<一致率の進路では、非一貫者が無業者になるか否かが重要な問題となる。

表 2-3 (省略)には高2冬の進路希望ごとの進路分布を一貫者/非一貫者別に示した。いずれかの時点で進路希望を変更している非一貫者では一致率が低く無業者率が高く、たとえば就職希望の非一貫者では半数以上が無業者である。フリーター希望者では非一貫者でも無業者率が34.6%にのぼり、高3になって進路を変更しても無業者になりやすい。非一貫者では準フリーターよりもフリーターが多いが、短大を除く一貫者ではフリーターよりも準フリーターのほうが多くなっている。

以上をまとめると、進路希望が揺れやすいために無業者率が高い進路と、進路希望は揺れにくいが実現しにくい進路があり、この両者から無業者が輩出されていることになる。就職は揺れにくいが実現しにくい進

路であり、求人増など労働市場の変化によって一貫者の一致率が上昇すれば無業者率が低下すると予想される。一方、短大では一貫者の無業者率はそれほど高くないが、進路希望が揺れやすく一貫率が低い。しかも非一貫者のフリーター率が高いために、無業者率が高くなっている。さきにみた短大の一致率の低さは一貫率の低さによるものであったと考えられる。

2-3 学科による違い

学科によって無業者の輩出構造はどのように異なっているだろうか。高2冬の進路希望ごとの一致率を学科別にみると、最も異なる進路は就職で、専門学科62.0%、普通科31.6%となっている。

そこで、まず一貫率をみると、一貫率と学科との間に統計的に有意な関連性が認められるのは就職のみで、普通科43.5%、専門学科70.2%となっており（有意水準0.1%）、普通科の就職希望は揺れやすいと考えられる。次に就職希望の一貫者の一致率をみると、普通科65.8%、専門学科83.6%で統計的にも有意である（有意水準0.1%）。専門学科では高2冬から就職希望が一貫していればほぼ就職できるが、普通科では就職できる比率が低い。普通科では専門学科より一貫率も一貫者の一致率も低く、このため学科による一致率の違いが生じているといえよう。

ただし、就職希望の一貫者でも学科によって就職活動の熱心さが異なる。「求人票を見た」は普通科74.0%、専門学科83.6%でそれほど大きく違わないが、「就職試験を受けた」は普通科43.8%、専門学科73.8%と大きく異なる。「職場見学」「就職試験模試」など他の活動も同様である。普通科では求人票を見ただけで実際の就職活動に移らない就職希望者が少なくない。また、高2冬の「あまり考えていなかった（不考）」の無業者率をみると、普通科41.0%、専門学科23.9%となっている。これは進路指導の違いによると考えられ、専門学科では38.6%が正社員就職、20.5%が専各進学であるのに対して、普通科の正社員就職は8.8%にすぎない。普通科からの就職は一貫者でも容易ではなく、本人が就職をとくに強く希望していない場合は一層困難であることが示唆される。

3. 無業者のタイプ

3-1 無業者の分類

進路「フリーター」が回答したフリーター志望理由から、フリーターを「進学断念型」「就職断念型」「目標設定型」「モラトリアム型」の4類型に分類した（表2-4省略）。自ら進路「フリーター」と回答している者でも半数以上は断念型である。同様に「準フリーター」についても、もともとの進路希望によって分類した。「フリーター」「準フリーター」合計の無業者タイプの分布で最も多いのは進学断念型、次いで就職断念型であり、この両方で67%を占める。進路選択ができない「モラ

リアム型」や、進学や就職以外にしたいことがある「目標設定型」は、むしろ少数派である。

無業者の高2冬の時点での進路希望は、専各29.8%>就職23.1%>考えていなかった17.0%、となっており、フリーターは8%にすぎない。各進路希望と無業者タイプとの関係をみたところ、専各希望者でも就職希望者でも過半数が断念型である。それに対して「考えていなかった」ではモラトリアム型が29.0%にのぼる。また、高2冬のフリーターでも就職断念型が4割近くを占め、進学断念型と合計すれば過半数に達している。

3-2 進路変更の時期と変更先

ここでは高2冬の就職希望者と専各希望者ともに焦点をあて、それぞれの進路希望から、どの時期に変更が生じ、その変更が無業者輩出とどのようにかかわっているのかをみていく（表2-5省略）。

まず就職希望者であるが、高2冬の就職希望者の約40%が高3になってから進路を変更しており、変更時期と成績との間には5%水準で統計的に有意な関連性がある。その時期は、高3春45.2%>夏33.3%>秋21.5%である。春の変更者では専各への変更が42.9%であるが、変更時期が遅くなるほどフリーターへの変更が増加し、卒業時の無業者率も増加する傾向にある。

高2冬の専各希望者も49.8%が進路を変更しているが、就職とは異なり変更時期と成績との関連性はみられない。変更時期は、春51.9%>夏32.7%>秋15.4%で、就職希望者よりも早い時期に変更が生じている。春の変更者では就職への変更が35.2%と最も多く、フリーターは18.5%である。夏の変更者でもフリーターはそれほど多くないが秋の変更者で急増する。やはり変更時期が遅いほど無業者率も上昇するが、就職からの変更者よりは低くなっている。

3-3 進路変更と無業者タイプの関係

無業者について、進路変更者（＝非一貫者）と一貫者を比較すると、高2冬の就職・専各希望者では、ほぼ3割を占める一貫者のほうが断念型が多い。一方、短大は一貫者の比率が低だけでなく、進路変更者のほうが断念型が多く、就職断念型が40.9%を占める。さきに短大が揺れやすい進路希望であることをみたが、短大が就職かで迷い、進路変更が間に合わず無業者になる層があることがうかがわれる。高2冬の「考えていなかった」も同様の傾向にあるが、「モラトリアム型」が29.0%にのぼる点が他の進路希望とは異なっている。

以上の分析から、無業者の輩出プロセスは高2冬の進路希望や学科によって異なっており、また、輩出プロセスによって無業者のタイプも異なることが明らかになった。今後の研究においては、無業者タイプを十

分に考慮する必要があると考えられる。佐藤（粒来）香

第3章 職業生活意識と無業者

1. 問題

学卒後、進学もせず、正規雇用労働にも従事しない者（無業者）の増加については様々な要因が指摘されている。高卒無業者の増加に関して、意識面に注目した小杉（2000）は進路多様校の生徒 2,476 人のデータから「将来の職業生活についての価値観」に関して次のような指摘をしている。

「フリーター第一希望者の持つ将来の職業生活観は、他の進路希望者と明らかな違いがあり、今を重視する刹那的な意識が強く“出世”というアスピレーションをほとんど持っていない。」

また下村（2000）は「現在の高校生の進路意識は“やりたいこと”と“いろいろな経験”を中心としており、“特定の進路を選ぶこと”と“自分の可能性を限定すること”を常に秤にかけている状況にある」ことを指摘している。

前章では、高卒無業者のタイプを検討してフリーターと準フリーターに大別した。フリーターのなり方に関して、フリーターは“by choice”，準フリーターは“by force”という自己認識があるところに注目したのである。本章では前章のタイプ分けに基づいて、高卒後の進路によって職業生活意識、経済的自立年齢の認識に差があるかどうかを検討する。

2. 方法

高卒無業者研究会の調査データのうち、進路がほぼ確定した 2001 年 2 月の「第2次データ」を用いて、進路別の職業生活意識（18 項目）、経済的自立年齢の認識に差があるかどうかを検討する。進路については4類型（進路決定、フリーター、準フリーター、その他ほか）で決定－未決定の差をみて、7類型（正社員内定、専各進学、短大進学、4年制大学進学・浪人、フリーター、準フリーター、その他ほか）でその内容を詳しく検討する。また、準フリーターについてはさらに進学断念、就職断念、夢追求、モラトリアムの4つのタイプに分けて検討する。

3. 結果と考察

① 高卒後の進路と職業生活意識

進路4類型でみても、7類型でみても全 18 項目で進路と職業生活意識に関して有意な差（0.1 %水準）がある。以下、質問項目ごとにとくにフリーターと準フリーターの差異に注目して概観する。

「A.今の世の中、定職に就かなくても何とか暮らしていける」に関して全体では約40%が肯定的（「とてもそう思う」＋「ややそう思う」）である。肯定する割合は

フリーター（53.4%）＞4大進学・浪人（35.7%）、専各進学（36.1%）、準フリーター（37.8%）となっており、準フリーターの意識は進路決定者と差がない。「B.将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関して、全体では55%が肯定的である。肯定する割合は短大進学（62.0%）、準フリーター（60.4%）、フリーター（59.0%）＞正社員内定（45.7%）、4大進学・浪人（47.5%）となっており、準フリーターの意識はフリーターと差がない。「C.若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」に関して、全体では約77%が肯定的である。一般に就職者に比べて進学者で肯定する割合が高い。肯定する割合はフリーター（83.7%）、短大進学（81.0%）、4大進学・浪人（80.3%）＞正社員内定（69.8%）である。準フリーターの意識はどちらかといえばフリーターに近い。「D.人並みに暮らしていければ就職先にはこだわらない」に関して、全体では約46%が肯定である。肯定する割合はフリーター（57.7%）、正社員内定（56.6%）＞4大進学・浪人（36.3%）、専各進学（37.2%）であり準フリーターの意識はフリーターと異なる。「E.いろんな職業や職場を経験したい」に関して、全体では約51%が肯定的であり、「全くそう思わない」割合はフリーターが高い（14.7%）。フリーターは「自分探しをしながら社会を漂っている」という言説は少なくともここでは検証されない。

「F.人並み以上に出世したい」に関して、全体では約52%が肯定的である。肯定する割合は4大進学・浪人（59.7%）、専各進学（56.5%）＞フリーター（42.3%）となっており、フリーターのアスピレーションの低さがうかがえる。準フリーターの意識はどちらかといえば進路決定者に近く、フリーターとは明らかに異なる。「G.将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」に関して、全体では約35%が肯定的である。肯定する割合は専各進学（41.8%）＞正社員内定（26.7%）であり、準フリーターの意識はフリーターと差がない。「H.将来のことはわからない」に関して、全体では約70%が肯定的である。肯定する割合は準フリーター（75.3%）、フリーター（74.0%）、正社員内定（73.2%）＞専各進学（62.0%）であり、準フリーターの意識はフリーターと差がない。「I.ひとよりも高い収入を得たい」に関して、全体では約69%が肯定的である。肯定する割合は4大進学・浪人（73.0%）＞準フリーター（67.0%）、フリーター（65.4%）であり、準フリーターの意識はフリーターと差がない。「J.安定した職業生活を送りたい」に関して、肯定する割合が全体では非常に高い（約89%）。肯定する割合は正社員内定（93.8%）、短大進学（92.2%）、準フリーター（90.6%）＞フリーター（84.0%）であり、準フリーターの意識はどちらかといえば進路決定者に近い。

「K.専門的な知識や技術を磨きたい」に関して、全体では約83%が肯定的である。肯定する割合は専各

進学(95.7%), 4大進学・浪人(92.0%) > 正社員内定(73.3%), フリーター(71.6%)であり, 準フリーターの意識は明らかにフリーターと異なる。「L.男子は, きちんと定職を持つべきである」に関して, 全体では約78%が肯定的である。肯定する割合は短大進学(85.4%), 正社員内定(82.3%) > 4大進学・浪人(74.6%)であり, 準フリーターの意識はフリーターと差がない。「M.自分に向いている仕事がわからない」に関して, 全体では約53%が肯定的である。肯定する割合はフリーター(60.4%), 4大進学・浪人(58.9%), 準フリーター(58.0%) > 専各進学(40.6%)となっており, 準フリーターの意識はフリーターと差がない。「N.有名になりたい」に関して, 全体では約40%が肯定的である。積極的に肯定する(「とてもそう思う」)割合はフリーター(24.5%)が最も高い。肯定する割合は専各進学(44.6%), フリーター(44.0%), 4大進学・浪人(42.1%) > 短大進学(29.4%)である。準フリーターの意識はフリーターとあまり差がなく, 将来の生活のあきらめ感には性差がある。

「O.やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」に関して, 全体では約56%が肯定的である。積極的に肯定する割合は, 明らかにフリーター(38.0%)が高い。準フリーターの意識は進路決定者と差がない。

「P.女性もできるだけ仕事を続けるべきである」に関して, 全体では約65%が肯定的である。肯定する割合は短大進学(74.1%) > 準フリーター(60.8%), フリーター(61.0%)となっており, 準フリーターの意識はフリーターと差がない。「Q.自分に合わない仕事はしたくない」に関して, 全体では約85%が肯定的である。肯定する割合はフリーター(89.3%) > 正社員内定(81.0%)であり, 積極的に肯定する割合はフリーター(65.0%) > 正社員内定(47.9%)である。準フリーターの意識はフリーターと異なり他のカテゴリーに近い。正社員として就職する者のあきらめ感がうかがえる。「R.3K(きつい・きたない・危険)の仕事はしたくない」に関して, 全体では約60%が肯定的である。肯定する割合は短大進学(77.6%) > 準フリーター(56.4%), 専各進学(57.5%)でありフリーターの意識は準フリーターとあまり差がない。

準フリーターの中で差がみられた項目は「B.将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」(モラトリアム > 進学断念), 「D.人並みに暮らしていければ就職先にはこだわらない」(モラトリアム, 就職断念 > 進学断念, 夢追求), 「E.いろんな職業や職場を経験したい」(就職断念, 夢追求 > モラトリアム, 進学断念), 「H.将来のことはわからない」(モラトリアム > 夢追求), 「J.安定した職業生活を送りたい」(就職断念 > 夢追求), 「K.専門的な知識や技術を磨きたい」(進学断念, 夢追求 > 就職断念, モラトリアム), 「M.自分に向

いている仕事がわからない」(モラトリアム > 夢追求)の7項目である。

② 高卒後の進路と経済的自立の年齢の認識

表3-1 内定進路と経済的自立

進路\自立年齢	18歳	20歳	22～23歳	25歳	30歳～	N
正社員内定	8.9	47.9	26.4	13.4	1.8	447
専各進学	2.9	34.6	43.3	16.5	1.0	485
短大進学	6.9	31.0	44.8	16.4	0.9	116
4大進学・浪人	3.7	21.9	48.5	21.3	1.6	375
準フリーター	5.2	39.9	34.7	13.9	2.8	288
フリーター	12.3	43.7	27.3	12.7	1.3	300
合 計	6.8	37.0	36.6	15.3	1.6	2011

高卒後の進路と経済的自立年齢の認識に関して整理したのが上の表である(その他・無回答は省略)。フリーターが若い年齢で自立する認識を持っていることがわかる。「18歳ぐらい」をあげる割合が他の進路と比較して明らかに高い。20歳ぐらいまでに経済的自立を考えているのは正社員内定とフリーターであり, 他はだいたい学校卒業後2年程度の年齢をあげている者が多い。フリーターと準フリーターの違いもよく出ている。少なくとも認識のレベルでは, フリーターが自立を先送りするモラトリアム志向があるとはいえない。むしろ, 早くからの生活者志向があるとも解釈できるのではないだろうか。

4. 小 括

本来は就職か進学を希望していたが結果として進路未決定のまま卒業する者(準フリーター)は, 職業生活意識に関してフリーターと共通する点が多い。しかし, 本来の進路希望は別のところにあったためか, 準フリーターは就職先へのこだわりがあり, 出世へのアスピレーションもフリーターより強い。また, 安定した職業生活を希求し, 専門的な知識や技術を求める気持ちも強い。こうしたことから, 現実を受け入れるためのいわば「あきらめの論理」が少なくとも意識レベルではそれなりにあることがうかがえる。別の見方をすれば, 実際の進路指導の場面では, まだこの時点では就職あるいは進学(経済的な問題もあるのでかなり厳しいが)の方向付けの余地は残されていることを示している。とくに就職に関しては, 学校を離れると多くの者にとって情報そのものが入りにくい現実があるので, 現実原則で動く生徒にどれだけ有効なアプローチができるか樂觀はできないが, 卒業まであるいは卒業後一定期間を含めた指導は必要であると考えられる。

準フリーターの中では, 自分なりの考えに従って突き進み野心的な夢追求型と全般的にアスピレーションが弱く現在指向が強いモラトリアム型に注目する必要がある。両者に共通して問われるのは, 今何をしているかである。そして, 前者では周りの人たちから非難されないために用意した言葉としての夢ではなく,

実現可能な「目標」を現実に引き寄せる行動、後者では何でもいから働き今を充実させる行動が求められるといえる。

高卒後の進路と経済的自立の年齢の認識に関しては、フリーターに自立を先送りするモラトリアム志向があるとはいえず、むしろ早くからの生活者志向がある。ただし、ここでも問われるのは今何をしているかであり、意識レベルと行動レベルの乖離が大きいほど、今を楽しむわけでも将来に希望をつなぐわけでもない「つまらない」生活を送ることになると思われる。いずれにしても、等身大のモデルである彼ら・彼女ら自身の「今」でしかフリーターの現実はとらえられないと思われる。(長須正明)

第4章 誰が無業者になるのか

1. 問題

昨年度報告した第1次調査において、私たちは高校2年生のフリーター志望と家庭的背景の関連について、次のような知見を得た(抜粋)。

①社会階層と学業成績は、ともに、進路志望と深く関わっている。フリーター志望者は、「高等教育・ブルーカラー」と「中等教育・ブルーカラー」で多い。短大・四大志望者は、高等教育・ホワイトカラーで顕著に高い。他方、フリーター志望者は、成績の自己評価の低い者ほど多い。逆に、成績上位者ほど短大・四大志望者が多い。

②社会階層、学業成績、進路志望の3者の関連を見ると、短大・四大志望者が高等教育・ホワイトカラーで多く、中等教育・ブルーカラーで少ない傾向は、どのような成績層でも見られる。業績主義的なアスピレーションの冷却とは別に、社会階層的背景がアスピレーションを左右する。フリーター志望者は、成績上位および中位層では、ブルーカラー層から相対的に多く出現している。しかしながら、成績下位層では、中等教育・ホワイトカラーを除いて出現率に大きな社会階層差はない。階層的背景にかかわらず成績下位であることがフリーター志向を生み出しやすい可能性がある。

③経済的豊かさと進路志望の間には強い関連は見られないが、成績が下位になるほど、経済的に豊かな層で短大・四大志望が多く、就職・家事手伝いが少ない傾向が明瞭になる。業績主義的なアスピレーションの冷却は、経済的に豊かな場合よりも豊かではない場合に、働きやすい。逆にいえば、属性主義的なアスピレーションの冷却は、成績下位者で生じしやすい。

これらの知見は、高校2年生の冬の時期における、進路志望(したがってフリーターに関しても「フリーター志望」と家庭的背景との関連である。この章では、高校3年生の内定進路を対象として、①家庭的背景

と内定進路に関して第1次調査の知見を再検討するとともに、②学校階層上の地位、労働市場における学校の地位、学業成績、学校生活へのコミットメントなどの変数を加えてフリーター志望の規定要因を探ることにより、③「誰が無業者になるのか」という問いに対して、総括的な検討を行うことを目的とする。

2. 家庭的背景と内定進路

家庭的背景と、高校3年生1月時点における内定進路との関連を示したのが、表4-1(省略)である。家庭的背景として、第1次調査と同様、父職、父学歴、母学歴、家の経済的豊かさの4変数を用いている。以下のことがわかる。

①「フリーター」が多いのは、父職/現業・職人 21.1 %、母学歴/中学校 22.7 %、逆に父職/専門・技術 10.5 %、同/事務・販売 10.3 %、父学歴/高等教育 13.1 %、母学歴/高等教育 11.8 %である。ホワイトカラーおよび高学歴層で、フリーターが少ない。

②「四大進学・浪人」は、父学歴/高等教育 30.7 %、母学歴/高等教育 29.8 %、父職/専門・技術 26.3 %、同/管理 28.1 %、同/事務・販売 24.1 %で多い。進路多様校においても、ホワイトカラー及び高学歴層で四大進学・浪人が多くなっている。

③「就職(正社員)内定」は、父職/専門・技術 5.3 %、父学歴/高等教育 8.2 %、母学歴/高等教育 7.9 %で少ない。これは、これらのカテゴリで就職志望が実現しにくいことを表すのではなく、そもそも進学者が多く就職志望者が少ないことに起因する。逆に、就職内定者が多いのは、父学歴/中学校 19.8 %、母学歴/中学校 22.7 %である。

3. 誰が無業者になるのか

しかしながら、上記のように家庭的背景と内定進路との関連が見られるとはいえ、高校卒業後の進路が家庭的背景のみによって規定されるわけではない。表4-2(省略)は、学校偏差値階層、学業成績と内定進路との関連を示したものである。

学校偏差値階層別に見ると、進路決定者は、M階層(学校偏差値 50 以上、本調査では高位)で多く、L階層(40 ~ 42)ないしLL階層(39 以下)で少ない。逆に、フリーターと準フリーターは、M階層でごく少なく、LM階層以下から相対的に多く出現している。学業成績の自己評価別に見ても、成績下位者で進路決定者が少なく、フリーターが多い傾向が明瞭に現れている。

それでは、総合的にみて、誰が無業者となるのだろうか、そしてそれはどのようなプロセスを経てだろうか。(耳塚寛明)

<紙幅の都合上、図表を省略した。以下、当日発表資料に基づいて報告する。>